

教 育 研 究 業 績

2021 年 5 月 1 日

氏名 直井 文子

学位： 博士（人文科学）

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
文学（各国文学・文学論）	日本漢文学、中国文学、日中比較文学、比較文学、中国語

主要担当授業科目	スタディスキル、文章表現演習、東アジア地域研究、東アジア文化研究、日中比較文化論、比較文学論、中国語
----------	----------------------------------------------------

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項

事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例 1) 台湾、新生医護管理専科学学校国際交流講演	平成 22 年 3 月	台湾の新生医護管理専科学学校に於いて学生に「現代日本語の中に生きる漢語」というテーマで、日本語と中国語の中の同形の漢字熟語、につき、同形同義のもの、同形ではあるが部分的に意味の異なるもの、同形でも全く意味の異なるもの、などのグループに分け、その意味の相違や使い方などを中国語で講演・教授し、言葉を含めた相互理解の大切さを説いた。
2 作成した教科書・教材 1) 二松漢文 日本漢文	平成 18 年 3 月	二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」の一環としての漢文教科書作成にあたり、研究協力者として総括班に参加した。収録された日本人の漢文作品 10 篇の内、7 篇の原稿について訓点を施し、注を付し、作者・内容解説を執筆した。さらに 10 篇すべての原稿について二松学舎大学顧問、前総括責任者と合同協議を行い、表記・内容の検討をした。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 1) 平成 19 年度学生による授業評価	平成 19 年 7 月	学生による授業評価アンケート（中華文明論）で、「学生自身についての評定」「授業・教員および総合についての評定」とも、回答者のほぼ全員から 5 段階で 5 という高い評価を受けた。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 湯島聖堂第 22 回漢文教育研修会講師	平成 18 年 8 月 25 日	全国漢文教育学会主催の中学・高等学校教員向け研修会で「江戸後期の漢詩漢文」と題し、頼山陽の『日本外史』より「徳川氏論贊」を教材として講師を務めた。
2) 平成 21 年度教員免許更新講習講師	平成 21 年 8 月 3 日	東京成徳大学主催の教育職員免許状更新講習に於いて、国語科の中の漢文の講習を担当した。教材には『論語』の文章、頼山陽・上杉謙信の書いた漢詩を使用した。
3) 平成 23 年度教員免許更新講習講師	平成 23 年 8 月 5 日	東京成徳大学主催の教育職員免許状更新講習に於いて、国語科の中の漢文の講習を担当した。教材には日本漢詩文を主に使用

4) 平成 24 年度教員免許更新講習講師	平成 24 年 8 月 3 日	し、頼春水の『在津紀事』の文章、頼山陽の『山陽遺稿』の中の漢詩、李白の漢詩、祇園南海の漢詩を用いた。 東京成徳大学主催の教育職員免許状更新講習に於いて、国語科の中の漢文の講習を担当した。教材には日本漢詩文を主に使用し、古賀侗庵の『女丈夫傳』の文章、中国の王昭君に関する白楽天、祇園南海、宮島栗香の漢詩を用い、比較文学的な教材研究の可能性について講義した。
5 その他 1) 独立行政法人大学入試センター試験教科科目第一委員会委員	平成 22 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日	独立行政法人大学入試センター試験の試験問題作成に当たった (平成 25 年 4 月 26 日付官報号外第 90 号)。
職 務 上 の 実 績 に 関 する 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1. 資格、免許 高等学校教諭 1 級普通教員免許状 (国語)	昭和 62 年 3 月	第 1243 号 (東京都教育委員会)
2. 特許等		
3. 実務の経験を有する者についての 特記事項 1) 近世後期の上州藩主・板倉勝明の 文学の研究	平成 5 年 4 月 ～平成 6 年 3 月	科学研究費補助金「奨励研究(A)萌芽的研究」の研究代表者として、安中藩主・板倉節山の著作を調査し、その文学性を探り、中国文学と比較研究をする目的であった。彼の全著作が予測に反して僅少であったため、その文学性を考察するには不十分であったが、編纂した叢書や交友関係を検討し、より広く当時の文学意識を探る手掛かりを得た。研究成果は「甘雨亭主人板倉節山年譜稿」として『お茶の水女子大学中国文学会報』第 14 号に収録された。
2) 日本における詞の収集と整理	平成 18 年 4 月 ～平成 20 年 3 月	萩原正樹 (研究代表者)・松尾肇子・村越貴代美・直井文子による平成 18 年度科学研究費補助金「基礎研究 (C)」の研究分担者として、日本人の創作した詞を収集・整理し、総集出版事業を進めた。直井は主に江戸時代の資料収集と、森槐南の作品の校訂や句読を施すなどの役割を担った。
3) 18・19 世紀の日中比較文学研究 —頼氏・齋藤拙堂・眞龍院を中心に—	平成 20 年 4 月～ 平成 23 年 3 月	平成 20 年度科学研究費補助金「基礎研究 (C)」の研究代表者として、近世日本の漢詩文作者で、世にあまり知られていない 7 名を選び、その作品の文学性を、中国のものと比較することを試みた。平成 20 年度は論文「頼春水の詩」をまとめた。平成 21 年度は論文「頼山陽の真『狂』」、「頼杏坪の詩」をまとめた。平成 22 年度は論文「前田斎広夫人眞龍院の漢詩」をまとめた。
4. その他		

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は 発表学会等の名称	概 要
(学位論文) 江戸後期日本漢文学研究 —斎藤拙堂・頼山陽・頼春 水・頼杏坪を中心に—	単著	平成 28 年 9 月	お茶の水女子大学	日本漢文学という研究分野の必要性を、その中でも江戸後期の重要性を説き、特に副題の 4 名について、彼らの作品に表わされた文学的思惟とその時代における意義、その連関性などを論述した。この 4 名は世代が異なり、それぞれが文学的鑑賞に堪え得る漢詩文作品を遺している。彼らの社会的立場は当時の典型と言えるが、そこに至る過程は、典型から少し外れている。当時の文人的要素と、彼らの文人意識の度合いを考察し、流行の「狂詩狂文」に流れなかった彼らの儒者としての「狂」意識の検証を試みた。
(著書) 1. 菅茶山 頼山陽詩集	共著	平成 8 年 7 月	岩波書店	共著：水田紀久、頼惟勤、 <u>直井文子</u> 新日本古典文学大系第 66 巻として江戸時代後期の漢詩人菅茶山・頼山陽の詩集を編纂するに当たり、菅茶山の詩は水田紀久氏が、頼山陽の詩は頼惟勤氏と直井文子が担当し、 <u>直井</u> は 300 首の詩の本文の校訂、注の原稿執筆をし、頼氏と内容・表記等を検討した。
2. 二松漢文 日本漢文 (再掲)	共著	平成 18 年 3 月	二松学舎大学 COE 事務局	二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」の一環としての漢文教科書作成にあたり、研究協力者として総括班に参加した。収録された日本人の漢文作品 10 篇の内、7 篇の原稿について訓点を施し、注を付し、作者・内容解説を執筆した。さらに 10 篇すべての原稿について二松学舎大学顧問、前総括責任者と合同協議を行い、表記・内容の検討をした。
(学術論文) 1. 斎藤拙堂における韓愈 —『拙堂文話』をめぐって—	単著	昭和 63 年 4 月	お茶の水女子大学中国 文学会報 第 7 号 pp. 177-181	江戸後期の伊勢の津藩藩儒・斎藤拙堂が、中国の唐宋八大家の一人・韓愈に対し、文章のみではなく人格をも景仰していたことや、それと代表作『拙堂文話』での主張との関わりを明らかにし、そこに到る過程を考察した。それは当時の流行に沿っているようでありながら、儒学

2. 齋藤拙堂の詩と紀行文	単著	平成3年3月	お茶の水女子大学人間文化研究年報 第14号 pp. 2/43-55	<p>の正統に立ち返っており、実行可能で妥当な意見として知識層に比較的受け入れられやすかったであろうことを論証した。</p> <p>拙堂の未刊の詩稿の入手を契機に、彼のもう一つの代表作「梅谿遊記」をはじめ、名手と謳われたその紀行文と詩との意義を検討した。そして彼は儒者として勸善懲惡・道徳論の文学観を守る立場にあったが、紀行詩文においては早くから、更に詩においては紀行以外でも、自己の心情を思うままに表現し、新しい文学観を表出しており、それには時代の趨勢も関与していたことを明らかにした。</p>
3. 『拙堂文話』版本について	単著	平成5年5月	汲古書院刊 和漢比較文学叢書第17巻『江戸小説と漢文学』 pp. 55-73	<p>従来、同一種本のみが通行していると思われていた『拙堂文話』の異本発見を契機に、版本を検討しながら、その文章と引用された漢籍とに関わる改作の過程、当時の出版統制との密接な関係等を明らかにした。更に、改版で名前を削除された書物が、諷諫の語句を含むが故に中国宋代には称賛されたが、江戸の文政期には却ってそのために忌避されてしまったという対照的現象を明らかにした。</p>
4. 頼山陽の女性観と「十二媛絶句」について	単著	平成11年10月	日本中国学会報 第51集 pp. 255-271	<p>頼山陽は日本史上の12人の女性を題にして絶句を作り、『山陽詩鈔』に収めた。しかし定稿が成るまでに数種の異なる稿本がある。本稿はその定稿の成り立ちを検討した上で、最終的にその12人を選んだ理由を探り、彼女らへの山陽の評価と、当時の一般的な評価とを比較し、更に山陽の女性観と、儒教における女性観、この12人との関わりを考察した。</p>
5. 齋藤拙堂の『海外異伝』とその匡謬書について	単著	平成14年3月	斯文 第110号 pp. 14-30	<p>山田長政・濱田彌兵衛・鄭成功の伝記を齋藤拙堂が漢文で著したものに対し、謹厳な儒者の谷三山が批判・誤謬訂正を加えたものを著し、その他にも賛否両論があった。本稿は、それら一連の事情を整理し、拙堂と三山の考え方の相違、森田拙齋や他の儒者らと拙堂との文学観の相違を明らかにし、しかし拙堂は最終的に儒者としての立場を守ったことを確認した。</p>

6. 墓銘を書く山陽先生と拙堂先生	単著	平成 14 年 10 月	佐藤保・宮尾正樹編、汲古書院刊『ああ哀しいかな一死と向き合う中国文学―』 pp. 191-207	年齢は 17 歳離れているが、忘年の交わりを結んだ瀬山陽と齋藤拙堂とが、他人を弔う文や墓碑銘等を書く際に、どのような書き方をしていたかを比較検討し、その相違点を明らかにし、それが彼らの、市井の儒者・文人と藩儒という生き方に、どのように関わっていたかを考察した。また山陽が生き方のよく似ていると言われる清の袁枚と彼らを比べ、その相違を明らかにした。
7. 『海外異伝』の執筆「異識」	単著	平成 17 年 3 月	日本漢文小説研究会(代表:内山知也)編、白帝社刊『日本漢文小説の世界』 pp. 99-115	5. の論文に続き、齋藤拙堂の『海外異伝』の特徴を再考したものである。この書は著者の意思に反して世に出されてしまったが、拙堂と交流があった大名やそのまた交友関係者の間で広まり、多くの支持者があったこと、嘉永 3 年当時の世情を考えれば、恰好の啓蒙書であったことなどを明らかにした。そして著者が意図した「史伝」よりも、より面白い「小説」としての特徴を備えた作品となっていると結論付けた。
8. 齋藤拙堂と「狂」	単著	平成 20 年 3 月	東京成徳大学人文学部研究紀要 第 15 号 pp. 170(1)-163(8)	江戸時代の文政期以降に活躍した齋藤拙堂の、これまであまり評価されていない漢詩作品の中で、題名や本文に「狂」を扱ったものを抽出し、作者がその文字を使用した意図を考察した。その結果、中国古代の「狂」の意識からやや離れ、唐代以降から現在使われている意味に近い方向で使用していることを明らかにし、それは当時としては、儒者の立場を離れ、文人としての考え方により近かったと結論付けた。
		平成 21 年 7 月	佐藤保編、汲古書院刊『鳳よ鳳よ―中国文学における<狂>』 pp. 169-183	同論文の転載に当たり、齋藤拙堂に関する簡単な紹介文を、論文冒頭に付した。
9. 頼春水の詩	単著	平成 21 年 3 月	東京成徳大学研究紀要―人文学部・応用心理学部― 第 16 号 pp. 166(1)-157(10)	謹厳な広島藩儒としてのイメージが強い頼春水の詩を、あまり世に知られていない全作品も含めて検討し、他者との関わりを前提としない、自己の心情を詠んだ詩に於いては、その一見華やかな人生とは裏腹に、孤独の様相が強いことを考察した。

10. 頼山陽の真「狂」	単著	平成 21 年 7 月	佐藤保編、汲古書院刊『鳳よ鳳よ—中国文学における〈狂〉』pp. 145-168	青年期に脱藩の罪を犯し、「狂」と外部から見なされた頼山陽が、そのことにどう向き合って生きたのかを、彼の漢詩に表された「狂」の字を手掛かりに考察した。その結果、彼は「狂」を今日的な使い方から中国の伝統的な意味での使用法に変化させ、最後には自負の意味を込めていたことを論証した。
11. 頼杏坪の詩	単著	平成 22 年 3 月	東京成徳大学研究紀要—人文学部・応用心理学部— 第 17 号 pp. 188(1)-179(10)	兄の春水と同じく広島藩儒となったが、藩の郡奉行に転じて実務に携わり、75 歳でやっと致仕を許された頼杏坪の、漢詩作品に込めた思いを探究した。その結果、君主に忠義を尽くしつつ民衆の為になることを常に考え、旺盛な好奇心を持ち続け、精力的に仕事をした杏坪は、閑居することが苦しみであり、詩作によって閑暇の身を慰めると共に、自己を含めて老い行く人々への応援歌として漢詩を作ったことを考察した。
12. 前田斉広夫人真龍院の漢詩	単著	平成 23 年 3 月	東京成徳大学研究紀要—人文学部・応用心理学部— 第 18 号 pp. 170(1)-164(7)	石川県金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵の、前田斉広夫人真龍院の江戸から初めて加賀へ旅した際の日記『越乃山ふみ』の写本を調査し、検討した。その結果、真龍院の漢詩作品は、この旅日記に載っている 5 首のみと思われ、漢詩作者として評価するには作品数があまりにも少ないことが判明し、真龍院の文学意識はほとんど和歌によって表されていると考えられた。しかしその漢詩の用語を引き続き検討し、どのように漢詩文を勉強し漢詩を創作したのかを探った。その結果、特定の中国の文人と比較することはできず、また真龍院が傾倒してその詩語を使用したような特定の詩人も、存在したとは言えなかった。しかし真龍院は幅広い教養を身につけ、作品は近体詩の作法にも十分にならっていたことを確認した。
13. 頼杏坪の『十旬花月帖』について	単著	平成 24 年 3 月	東京成徳大学研究紀要—人文学部・応用心理学部— 第 19 号 pp. 152(15)-143(24)	頼杏坪が晩年に休暇を賜り、広島から京都・大阪へ旅行した間に、自作の漢詩と和歌、更に諸家より寄せられた詩歌や絵画等を記した『十旬花月帖』を手掛かりとし、杏坪の漢詩と和歌とへの創作意識の一端の考察を試みた。その結果、杏坪は漢詩と和歌とを、それぞれの場に相応

<p>14. 頼杏坪の漢詩と和歌とについて</p>	<p>単著</p>	<p>平成 24 年 5 月</p>	<p>台湾、玄奘大學刊『2012 語文教學暨文化交流國際學術研討會 會議手冊暨論文集』 pp. 23-34</p>	<p>しい形と内容とで創作したのみならず、両者を上手に組み合わせ、当時通常の日本の漢詩人があまり行ない得なかった、独特の世界を作り上げていたことを見出した。そして両種の作品を持つ作家は種別の作品集が編纂されることが多いが、杏坪のこの書の場合は、漢詩と和歌とを切り離さずに一緒に鑑賞すべきであることを確認した。</p> <p>玄奘大學の中文系暨應用外語系主催で開催された国際シンポジウムの日本語教学部会に於ける発表の原稿として、論文集に掲載されたものである。上述の「学術論文」13 に基づき、更に杏坪の和歌と漢詩とを検討した。その結果、『十句花月帖』は和歌と漢詩とを並列してある部分もあるが、『新撰萬葉集』のように漢詩が和歌の翻訳や、和歌の内容を敷衍したものであるとは異なり、両者が一体となって独自の世界を作り出しており、それは杏坪の作品の新たな特徴であることを確認した。</p>
<p>15. 江戸後期の漢詩文に表わされた「茶」について—頼山陽、頼春水、齋藤拙堂の場合—</p>	<p>単著</p>	<p>平成 31 年 3 月</p>	<p>『斯文』第 134 号 pp. 125-145</p>	<p>頼山陽の漢詩文で「茶」を詠み込んだ作品を中心に父親の頼春水、17 歳年下の齋藤拙堂その他の詩人の作品と比較し、江戸後期に「茶」がどのように漢詩文の中で表現されていたか、その展開を検討したものである。そして文人にとって日常的なものとなった茶を煎じる音に、頼山陽が特に興味を見出し、すぐれた作品を遺したことを指摘した。</p>
<p>(その他)</p> <p>1. <学会発表> 『拙堂文話』と韓愈—齋藤拙堂における韓愈の受容</p> <p>2. 齋藤拙堂年譜稿</p>	<p>単著</p>	<p>昭和 62 年 6 月</p>	<p>お茶の水女子大学中国文学会昭和 62 年度第 2 回例会</p>	<p>江戸時代の津藩藩儒・齋藤拙堂が、中国唐代の韓愈の詩文をどのように受け入れ、その人格までも尊敬し、その文を推奨したかを考察した。『拙堂文話』を主な手掛かりにし、拙堂は、前漢の司馬遷らの文章を理想としたが、そこに到る前の初期段階として、唐宋八大家の中でも韓愈を特に選んだが、その理由を明らかにした。</p>
<p>2. 齋藤拙堂年譜稿</p>	<p>単著</p>	<p>昭和 63 年 3 月</p>	<p>お茶の水女子大学人文科学紀要 第 41 巻 pp. 67-96</p>	<p>江戸後期の津藩何儒であり、文人としても名高い齋藤拙堂の年譜を作成した。</p>

3. 中国故事成語大辞典 ＜項目執筆＞	共著	平成4年9月	東京堂	和泉新・佐藤保共編 中国古代から現代に至るまで広く用いられている故事成語やことわざを、中国で編まれた故事成語集の類を資料とし、可能な限り網羅し採録した辞典の、「呉越同舟」など141項目の執筆を担当した。
4. 『耄語草』—飯岡義斎より頼春水へ— ＜資料紹介＞	単著	平成5年3月	お茶の水女子大学女性文化研究センター年報第6号（通巻13号） pp. 183-187	歴史家・詩人として名高い頼山陽の外祖父であり、漢学者・歌人であった飯岡義斎から、その娘婿に当たる頼春水（朱子学者）への文書を翻訳し、解説を付した。春水が広島藩儒として召された際、義斎が娘・静子に宛てて書いた教訓書と一対になるもので、藩儒としての心得を説いたものであるが、末尾に記された和歌には、義斎の惜別の情が溢れていることを指摘した。
5. 甘雨亭主人板倉節山年譜稿	単著	平成7年4月	お茶の水女子大学中国文学会報 第14号 pp. 61-72	江戸後期に安中藩主として治績を上げながら、学術を奨励し、『甘雨亭叢書』の刊行という一大事業を成し遂げた板倉節山の、年譜稿を作成した。
6. NHK文化セミナー『漢詩をよむ～詩人と行旅（秋水の巻）』	共著	平成12年10月	日本放送教育出版	石川忠久監修、宇野直人、河内利治、鷲野正明、直井文子ほか執筆協力 NHKラジオ第2放送のテキストで、平成13年1月放送分の原稿執筆を担当した。
7. 頼静子（号・梅颯）関係文献目録	単著	平成13年3月	お茶の水女子大学ジェンダー研究センター刊『頼梅颯日記の研究』＜ジェンダー研究センタープロジェクト報告＞pp. 135-139	大口勇次郎編で、頼山陽の母親の静子についての研究論文集を作成する際、関係文献資料の整理を担当し、目録を作成した。静子に関わる記述のあるものは、息子の頼山陽を主体としたものでも収録した。
8. NHKカルチャーアワー『漢詩への誘い～季節を詠う（清明の巻）』	共著	平成13年4月	日本放送教育出版	石川忠久監修、宇野直人、河内利治、鷲野正明、直井文子ほか執筆協力 NHKラジオ第2放送のテキストで、平成13年8月放送分の執筆を担当した。
9. NHKカルチャーアワー『漢詩への誘い～季節を詠う（寒露の巻）』	共著	平成13年10月	日本放送教育出版	石川忠久監修、宇野直人、河内利治、鷲野正明、直井文子ほか執筆協力 NHKラジオ第2放送のテキストで、平成13年11月放送分の執筆を担当した。
10. NHKカルチャーアワー『漢詩への誘い～人生を詠う』	共著	平成14年4月	日本放送教育出版	石川忠久監修、宇野直人、河内利治、鷲野正明、直井文子ほか執筆協力

う (行遊の巻)』				NHKラジオ第2放送のテキストで、平成14年5月3日～17日、8月23日の放送分の原稿執筆を担当した。
11. NHKカルチャーアワー『漢詩への誘い～人生を詠う (閑吟の巻)』	共著	平成14年10月	日本放送教育出版	石川忠久監修、宇野直人、河内利治、鷺野正明、直井文子ほか執筆協力 NHKラジオ第2放送のテキストで、平成15年3月放送分の執筆を担当した。
12. NHKカルチャーアワー『漢詩への誘い～歴史と風土 (長安の巻)』	共著	平成15年4月	日本放送教育出版	石川忠久監修、宇野直人、河内利治、鷺野正明、直井文子ほか執筆協力 NHKラジオ第2放送のテキストで、平成15年9月放送分の執筆を担当した。
13. 頼山陽の詩社と漁りの歌<文苑>	単著	平成15年6月	全国漢文教育学会『新しい漢字漢文教育』第36号 pp.81-91	頼山陽が広島や京都で仲間と形成した詩社の様子を検証し、当時の詩会の在り方や、文人同士の交流のさまなどを明らかにした研究ノートである。
14. 頼惟勤著作集Ⅲ『日本漢学論集』前書兼解説	共編 の内の 単著	平成15年7月	汲古書院	頼惟勤著、佐藤保、藤山和子、直井文子編の著作集の前書き件解説。 お茶の水女子大学名誉教授の故・頼惟勤先生の、日本漢学関係の遺稿を整理。校正し、その前書に原稿の解説を付した。
15. NHKカルチャーアワー『漢詩への誘い～歴史と風土 (金陵の巻)』	共著	平成15年10月	日本放送教育出版	石川忠久監修、宇野直人、河内利治、鷺野正明、直井文子ほか執筆協力 NHKラジオ第2放送のテキストで、平成16年3月放送分の執筆を担当した。
16. NHKカルチャーアワー『漢詩への誘い～歴史と風土 (杭州の巻)』	共著	平成16年3月	日本放送教育出版	石川忠久監修、宇野直人、河内利治、鷺野正明、直井文子ほか執筆協力 NHKラジオ第2放送のテキストで、平成16年8月放送分の執筆を担当した。
17. NHKカルチャーアワー『漢詩への誘い～歴史と風土 (成都の巻)』	共著	平成16年8月	日本放送教育出版	石川忠久監修、宇野直人、河内利治、鷺野正明、直井文子ほか執筆協力 NHKラジオ第2放送のテキストで、平成17年2月放送分の執筆を担当した。
18. <学会発表>『昔昔春秋』をめぐって	単著	平成17年12月	お茶の水女子大学中国文学会平成17年度第4回例会	齋藤拙堂の『拙堂文話』に大阪の中井履軒の作品として、猿蟹合戦の漢訳文が引用されている。しかし履軒の作とされている『昔昔春秋』の本文とは異なり、また通行本の『昔昔春秋』は儒者・赤井東海の作であるとの説がある。これらの事実を整理し、江戸時代に和文の漢訳が流行したことと、『昔昔春秋』出版との関係

19. <書評>茅の塞がりか 頓に開ける爽快感	単著	平成 18 年 2 月	東方書店刊『東方』 第 301 号 pp. 28-30	を検討し、作者の意図を探ることを試みた。 中国の日本研究者王青女史の学位論文を出版した『日本近世儒学家荻生徂徠研究』の書評として、その独特の観点に注目して述べた。
20. <座談会>先學を語る —頼惟勤先生	共著	平成 23 年 7 月	東方學會刊『東方學』第 122 輯 pp. 142-182	お茶の水女子大学名誉教授である故・頼惟勤先生の人と業績とを語る座談会に参加し、その記録と變譜・主要著作目録・系図の編集に携わった。
21. <シンポジウム発表及 他の発表者への講評> 頼杏坪の漢詩と和歌とについて (再掲)	単著	平成 24 年 5 月	台湾、玄奘大學刊『2012 語文教學暨文化交流國 際學術研討會 會議手 冊暨論文集』	玄奘大學の中文系暨應用外語系主催で開催された国際シンポジウムの日本語教学部会に於いて、上述の「學術論文」13に基づき、更に杏坪の和歌と漢詩とを検討し、論文 14 の内容を発表した。また同会に於いて玉川恵子氏の「千葉県観光客うけいれの観点から——」と、檜山千秋氏の「明治前期の国語状況」とについて、講評を述べた。
22. <書評>『新井白石『陶 情詩集』の研究』	単著	平成 28 年 11 月	全国漢文教育学会『新し い漢字漢文教育』 第 63 号 pp. 88-89	紫陽会 (代表 詹滿江) 編著の研究書につき、その詩語の来源の徹底的調査の細密さ、研究上の意義などについて述べた。